

「独立の気概なき者は人に頼る。人に頼れり者は人にへつらう」とは当時の官僚体制を嫌った福澤諭吉の言葉である。

150 年を経た今、しかし何が変わったであろうか。過剰な受験戦争は人間が独立して思考しようとする大切な中学・高校時代を奪い、米国型の自由のみを主張して社会的責任を放棄した無気力な国民を増産している。医療の世界では「医は仁術」と教えながら官僚が過度な医療統制経済を押しつけ、嫌が応でも「医は算術」を体験させている。産科医が不足して社会問題になっているが、その解決方法として医学生を増産することが実行されつつある。しかしどうして勤務医の低賃金・過剰労働と医療訴訟への恐怖がその根底にあることに目が向けられないのか。リスクの多い疾患と戦っている外科系の医師たちがどうして報われないのか。机上に座し、現実を見ずして統制を行っている官僚機構と医師の上げ足ばかりを追っているマスコミにその遠因があることに気づいた時はすでに手遅れなのである。ある分野の医師を育てるには 20 年要するからである。

この現実には産科のみならず、リスクの多い脳神経外科、心臓外科、一般外科に波及することは今後必至であろう。

1 月号の「扉」に書かれた野崎和彦先生の「日本人気質と自己責任」はまさに福澤諭吉が憂えた言葉に等しい。しかしもともと日本人は独立と自己責任に乏しい人種であったであろうか？昔の日本人には命をかけても社会を守ろうとした武士、政治家、職責に対しては金を積んでも妥協を許さなかった職人がおり、貧しくともしっかりと子供教育をした庶民家庭があった。それらは戦後愛国主義を弱めるために導入された米国型物質・自由主義と、軍隊に代わって主導権を握った官僚による教育統制、社会統制によって崩壊してしまったのである。大平で物に困らず、しかも自分の選択の余地の少ない社会に独立した考えを持つ人が育つはずはない。歴史的にみると独立した偉人が育った時代背景は、江戸末期のようにお上の主導が低下し、人民に将来への不安とともにまた道を選ぶ権利をものが与えられた時代なのである。

日本が戦後の混乱を救うために作られた強い官僚体制が必要な時代は終わり、今は成熟した社会が求められている。日本人が独立した考えを持ち、社会責任を考える国民に戻るためにはまず社会主義以上といわれるいろいろな官僚統制を縮小し、国民が自分で考え行動すること、すなわち民活による行動を育てることにあろう。医療体制に対しても国が主導すべき時代は終わっており、その管理を各学会などにもっと委ねる必要がある。倫理面においても萎縮医療が必発となるような刑事訴追を課する政策を排除し、学会にその判断を任せる必要がある。各医学会は現在のばらばらな体制を改めて一致団結してそれを国に要求すべきであろうし、日本医師会はいつまでも開業医の利益代弁者にとどまらず、勤務医と日本全体の医療をもっと真剣に討論すべきであろう。

また国民が一部の軽薄なマスコミの言動に踊らされないように各学会は地道に現在の医療問題をアピールし、本当に現在の医療費がこれでよいのかを国民とともに論議する場を作る必要があろう。したがって学会の役割は日増しに大きくなっており、それに対応した機能を備えるためにも本誌のような場のみならず国民に直結したアピールの場を模索する必要がある。